



隈府小だより

学校教育目標「自ら考え なかまと高め合う 隈府小
～ 明日が楽しみな学校をめざして ～」

隈府小学校
学校だより No.15
文責 芹川博文
8月26日(金)

当事者の方に思いを重ねる ～ この夏の 令和 8 年熊本地震に思う ～

7月28日(火)に襲った地震。皆様のご自宅、ご親戚や知り合いの中に、深い悲しみやショックを受けられた方、今も不自由な生活を送られている方がおられるのではと思います。

その日、私は熊本市での会議を終え駐車場の車の中にいました。もの凄い横揺れで、周りの建物を見渡し崩れてくるものはないかを確認しました。10年前を思い出し、どこが震源か情報を探しました。熊本市内からの帰路は大渋滞。特にガソリンスタンドへの長い列に驚きました。

次の週末、八代の知人宅に水や物資を持って行きました。途中のホームセンターでタンクを追加購入した際、店員さんの「どうぞ水道から水を入れていってください」との言葉が沁みました。途中の道で倒壊した家や亀裂の入った道路など被害の大きさを実感しました。

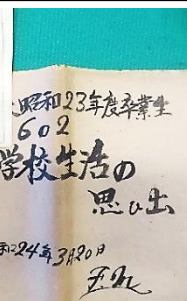
10年前の私は、迷惑になることや興味本位に取られるのではないかとの思いから、益城町に足を踏み入れるのを躊躇しました。しかし、しばらくたって最も被害の大きかった道を通った時、「もっと早く来るべきだった」と後悔しました。私の場合、現実を知ることから距離を置き、当事者の方に思いを重ねることをしていなかったと後悔しました。

現場に行かなくても、当事者に思いを重ね、行動することは沢山あるでしょう。しかし、現実を知ること、当事者の方の思いを知ることを通して、見えてくるものや感じることもあります。隈府小の子どもたちが大人になった時、心の中に令和 8 年熊本地震がどう残っているのかと考えます。今の自分に出来ることを考え、なかまと力を合わせていきたいものです。

当時の小学生の作文から知る事実 ～ 戦後間もない頃の小学6年生の作文を通して ～

民生児童員の松永 健士 様より貴重な資料をいただきました。教師をされ、昭和32～38年度は隈府小にもご勤務されていたお父様が大切に持っておられた資料の中から、終戦間もない当時の写真や小学生の作文が出てきたのです。

戦後81年目となるこの夏、改めてその作文を手に取り、下の作文を読んだ時、これは是非、多くの方に伝えなければならないと感じました。映画や本ではなく、当時の小学6年生の直筆の作文に綴られている内容に衝撃を受けたからです。



(前略)疎開の途中、山の中に逃げ込んで、山越え、川越えしてようやく大連などに来ていましたが、来ているのは10才以上の人だけで赤ちゃんや小さい子どもは、ただの一人もいません。なぜであろうかと聞いてみると、山の中を逃げる時、10才以下はそこに捨てていかなければ、きつい、足が痛い、腹が減ったのと言うから、もし、敵の兵隊に見つかったら、みんながだめになる。それより子どもを犠牲にして少しの人間でも助かろうと、隊長の命令で捨ててきたそう。お母ちゃん、待ってよ、と泣く子を後に逃げた親たちは、今になって子どもがかわいそうになって、仕事どころか、耳に子どもの呼ぶ声が聞こえて、たまらないと、やせこけておられる人が、だいぶおられた。(後略)

一人一役の水かけ、PTA 美化作業 大変お世話になりました

暑い夏でした。そのような中、一人一役で水かけに来ていただいた方、8月23日のPTA 美化作業に参加していただいた皆様、本当にありがとうございました。皆様のおかげで、野菜や花も持ちこたえ、美しい環境で前期後半を始めることができました。

これからも続くであろう暑さ。登下校も含め安全な学校生活を送れるよう努めます。

